

【原著論文】

バレーボールにおける指導者のストロークと選手の達成動機

Coaches' Strokes and Players' Achievement Motive in Volleyball

庄司直人*¹ 砂川宝樹*¹
Naoto Shoji Hoju Sunakawa

Abstract

Protecting sports integrity has become a very important theme in the sports domain in recent times. This study aimed to examine whether the instructor's stroke affects the achievement motive of college volleyball players. The research design was a cross-sectional study. The participants were 33 experienced college volleyball players. Data collection was conducted through a web-based survey. The outcome was the achievement motive as a proxy measure of volleyball performance, and the factor was the positive and negative strokes of the coaching they received before high school. The collected data were statistically analyzed; the analytical model was multiple regression analysis. The results showed that among the different motivations for achievement, the "challenge motive" was predicted by "manifestation strokes", among the positive strokes of past coaches (Adjusted $R^2=.72$, $F=81.85$, $p<.000$). Additionally, it was also shown that "others' praise motive" could be predicted to some extent by "manifestation strokes" (Adjusted $R^2=.30$, $F=14.67$, $p=.001$). "Enthusiasm motivation" was predicted by both manifestation strokes and physiological distress strokes, with negative strokes having a negative effect (Adjusted $R^2=.44$, $F=13.69$, $p<.000$). Among the positive strokes, "Suggestive strokes" had a certain effect on the unique desire motivation (Adjusted $R^2=.27$, $F=13.03$, $p=.001$). The results empirically demonstrate that positive strokes have a positive impact on players, and can be used for future coaching in volleyball, for various ages. It also shows that negative strokes, which may be linked to harassment, have a negative impact on players' future motivation toward achievement, which may contribute to demonstrating the significance of pursuing integrity.

Keywords : コーチング, リーダーシップ, インテグリティ, ハラスメント, 動機づけ

I. 緒言

近年、スポーツ・インテグリティの保護がスポーツ界における重要なテーマの一つになっている¹⁰⁾。その背景には暴力、ハラスメント、賭博、ドーピング、八百長などスポーツの価値を脅かす事件等が絶えないことがある。特に、暴力やパワーハラスメントは学生スポーツなどアマチュアスポーツでも取り沙汰され、選手にとって競技を続ける上で身近な脅威といえる⁵⁾。とりわけバレーボールにおいては、他競技と比べて特に暴力や体罰が多いことが明らかにされている^{2),13)}。こうした暴力をはじめ選手の心身を傷つける可能性のある行為は、指導者と選手、先輩（年長者）と後輩といった権威勾配のあるなかで行われる可能性が大きいと考えられる。学生スポーツの場合、特に指導者と選手（学生）という関係のなかで大きな権威勾配のもと活動したり、プレーすることになるため、指導者の行動・振る舞いは選手に非常に大きな影響を及ぼす

受付日 2022.2.18 受理日 2022.3.11

*1 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科

ものと考えられる。その指導者から選手に送られるストローク（他者の存在の承認を意味する全ての行為）にはポジティブなもの（褒める、信頼するなど）と、ネガティブなもの（怒鳴る、怒るなど）の双方が存在する。ポジティブなストロークは、受け手が愉快、歓迎できると感じたストロークであり、ネガティブなストロークは、受け手が不愉快、歓迎できないと感じるストロークである^{11),12),15)}。

指導者の振る舞いや言葉の掛け方など指導者の行為と選手のモチベーションとの関連が示唆されているが、ポジティブ・ストロークとネガティブ・ストロークがそれぞれ選手にどのような影響を及ぼすのか実証的に示した研究は散見される程度である⁸⁾。このことは、スポーツにおいてインテグリティの追求が進まない一因とも考えられる。つまり、倫理的で肯定的なポジティブなストロークが選手にポジティブに作用し、暴力や暴言などを含むネガティブなストロークが選手にネガティブに作用することを示す科学的根拠が乏しく、理想論のように語られてしまうことでインテグリティの追求が進まないということである。

こうした状況を鑑みると、指導者の選手に対するストロークがパフォーマンスにどのように影響を及ぼすのか検証することが必要であろう。特に、過去を含めた指導者のストロークの総体が今現在の選手にどのように作用するのか検討することは、スポーツに取り組む態度やパフォーマンスへの影響だけでなく、選手のアスリートとしてのキャリア、競技引退後のキャリアにおいても極めて重要であろう。なぜならば、指導者は目の前にいる選手の今だけでなく、選手の将来にも指導者自身のストロークが影響をおよぼす可能性があるのか明らかにされるからである。

指導者のストロークを説明変数とし、パフォーマンスとの関連やパフォーマンスへの影響を示すことが重要と考えられるが、競技パフォーマンスを適切に評価することは難しく何らかの代理指標を設定する必要がある。直接的に競技パフォーマンスを定量化することが困難な状況においては、スポーツに限らず様々な領域において成功の鍵の一つとされる達成動機（今まで以上に優れて、かつ効率的に物事を達成したいという願望であり、成功を望む人間には不可欠と多くの研究で結論づけられている）⁹⁾ がパフォーマンスの代理指標となり得るであろう。

スポーツ・インテグリティの保護が注目される今、指導者のストロークが選手の達成動機に影響を及ぼすかどうか検証し、指導者のストロークが競技成績に寄与する可能性を示すことができれば、今後のインテグリティ保護を加速させる呼水になり得るだろう。

そこで、本研究では指導者のストロークが大学バレーボール選手の達成動機に影響を及ぼすか検証した。

II. 研究方法

1. 研究デザイン：研究デザインは横断調査とした。

2. 対象者

対象者は大学バレーボール選手および大学バレー経験者 33 名であった。対象者の平均年齢は 20.3 歳 (SD = 1.08, Range = 18-23)。対象者は全員大学に在学中であり、1 年生 4 名 (12.1%)、2 年生 3 名 (9.1%)、3 年生 9 名 (27.3%)、4 年生 17 名 (51.5%) であった。なお、G*Power (ver.3.1) を用いてサンプルサイズ計算を行った結果、必要サンプルサイズは 36 名であった (分析モデル：重回帰分析、エフェクトサイズ = 0.3、有意水準 = 5%、検出力 = 80%、予測因子数：2)。今回のサンプルサイズは 33 名であるが、中程度の影響を観測するためには十分なサンプルサイズと判断した。

3. データ収集

データ収集は、Google フォームを用いた Web 調査により行った。収集したデータは、年齢、学年、競技歴、競技レベルを問う質問に加え、達成動機尺度^{6),8)}、ストロークに関する尺度としてスポーツ選手のやる気を上げ下げした指導者の言動・振る舞いに関する尺度¹⁵⁾、暴力行為を含むハラスメント尺度⁸⁾ に対する

回答を求めた。達成動機は「全然当てはまらない」から「非常によく当てはまる」までの7件法、ストロークに関する質問は、「非常にやる気をなくした」から「非常にやる気がでた」までの7件法、ハラスメントに関する質問は、指導者の言動・振る舞いが適切であるか・適切でないかを問い、さらにそれを実際に受けた頻度を「全くない」、「1～4回」、「5回以上」のいずれかで回答を求めた。

4. データ分析

まず、達成動機、ポジティブ・ストローク、ネガティブ・ストローク（ハラスメント）について因子分析を行った。因子分析は、主成分分析を採用し、バリマックス回転法を用いた。内的整合性の検討には級内相関係数を用いた。

本研究では、指導者のストロークがバレーボール選手の達成動機に影響を及ぼすかどうか検証することを目的としたため、重回帰分析を分析モデルとした。従属変数は達成動機の下位尺度とし、独立変数を指導者のストロークとした。指導者のストロークには、ポジティブ・ストロークを矢澤（2019）の尺度¹⁵⁾のうち選手がやる気がでたと評価した指導者の言動・振る舞いの下位尺度とし、ネガティブ・ストロークを熊安（2014）のハラスメント尺度⁸⁾の下位尺度とした。ハラスメント尺度は、その経験を3段階で回答させているため、「全くない」を0、「1～4回」を1、「5回以上」を2と定量化した。また、共変量としてハラスメント尺度⁸⁾の質問に対し、指導者の行為として「適切である」、「適切でない」の二択で回答を求めており、その回答を共変量として用いた。ただし、質的に似た質問が11問あり多重共変性に対処するため、因子分析により割り出された因子構造の各因子を代表する質問への回答を従属変数、それ以外の因子を構成する質問を独立変数に入れ傾向スコアを算出し、その傾向スコアをハラスメント受容傾向（やりすぎせるネガティブ・ストローク受容傾向、生理的苦痛を伴うネガティブ・ストローク受容傾向）として共変量に用いた。独立変数の投入はステップワイズ法を用いた。

5. 倫理的配慮

本研究は朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科研究倫理委員会で承諾された手続きで進められた（承認番号 2021005）。一部、追加のデータ取得については、同所属先の卒業研究における研究倫理審査に関するために即し、倫理審査を要する研究として届け出、研究計画書および研究手続きと倫理的配慮の詳細を記述した文書を提出した上で実施された。

Ⅲ. 結果

従属変数となる達成動機の因子分析の結果、4因子構造であることが示された（表1）。達成動機は、純粋な挑戦を楽しむ「挑戦動機」、他者からの評価や称賛を得ることに価値を置く「他者称賛動機」、競技そのものに熱中し向き合うことに動機づけられる「熱中動機」、勝ち抜く中でも自分らしさやユニークさを表現したい欲求「ユニーク願望動機」の4つの因子に分けられた。

ポジティブ・ストロークは、丁寧にわかりやすく説明するなど言語化し明示的なストロークを送る様子が見られる「顕示ストローク」と、難しい課題を与えながらも選手自身に考えさせるような行動が見られる「示唆ストローク」の2因子に分けられた（表2）。

ネガティブ・ストロークは、一時的な痛みを伴うもののやり過ごすことのできる可能性が考えられる「やり過ごすことのできるネガティブ・ストローク」と、触覚、痛覚、乾き、痺れなど避けることのできない苦痛を伴う「生理的苦痛を伴うネガティブ・ストローク」の2因子に分けられた（表3）。

達成動機の4因子を従属変数とし、ポジティブ・ストロークの2因子、ネガティブ・ストロークの2因子、2つのハラスメント受容傾向を予測因子としたモデルにより重回帰分析を行った（表5）。その結果、挑戦動機は顕示ストロークにより予測できることが示された（Adjusted $R^2 = .72$, $F = 81.85$, $p < .000$ ）。他者称

表 1 達成動機の因子分析

	因子負荷量			
	I	II	III	IV
挑戦動機				
他人と競争して勝つと嬉しい	.797	.331	.184	.217
部内の高い地位を目指す事は重要だと思う	.791	.223	.094	.123
みんなに喜んでもらえる素晴らしい事をしたい	.786	.291	.303	.240
こういう事がしたいなあと考えたとワクワクする	.733	.307	.004	.213
競争相手に負けるのは悔しい	.707	.328	.298	.170
ものごとは他の人よりうまくやりたい	.702	.409	.016	.401
練習やトレーニングを努力するのは、他の人に負けないためだ	.683	.328	.303	.246
今日一日何をしようかと考える事は楽しい	.651	-.036	.553	.258
ちょっとした工夫をする事が好きだ	.629	.228	.214	.498
色々な事を学んで自分を深めたい	.578	.423	.352	.161
難しい事でも自分なりに努力してやってみようと思う	.571	.530	.468	.028
他者称賛動機				
どうしても私は人よりも優れていたいと思う	.110	.856	.018	.150
世に出て成功したいと強く願っている	.428	.746	.033	.018
何か小さな事でも自分にしか出来ない事をしてみたいと思う	.274	.699	.275	.207
所属するチームは、社会で高く評価される所を選びたい	.233	.698	.294	.240
成功するという事は、名誉や地位を得る事だ	.275	.670	.307	.271
いつも何か目標を持っていたい	.517	.660	.142	.106
熱中動機				
結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい	.064	.140	.924	.088
何でも手がけた事には最善を尽くしたい	.459	.524	.605	-.020
人に勝つ事より、自分なりに一生懸命やる事が大事だと思う	.301	.375	.596	.262
ユニーク願望動機				
今の社会では、強いものが出世し、勝ち抜くものだ	.054	.148	.153	.835
決められた練習の中でも個性をいかしたい	.427	.228	.044	.779
人と競争するより、人と比べる事が出来ないような事をして自分をいかしたい	.469	.116	.092	.636
級内相関係数	.96	.91	.83	.80

表 2 ポジティブストロークの因子分析

	因子負荷量	
	I	II
顕示ストローク		
盛り上げてくれる	.892	.316
丁寧に分かりやすく説明する	.858	.336
楽しく教えてくれる	.824	.258
一緒に練習する	.815	.404
やる気がある	.793	.407
率先して動く	.782	.566
チームの状況を褒める	.763	.487
他のチームを詳しく分かっている	.693	.525
プレーで見本を見せてくれる	.680	.496
必死さが伝わる	.638	.606
上手いプレーを褒めてくれる	.636	.468
選手の状況を把握している	.597	.592
示唆ストローク		
難しい課題を与える	.148	.843
気持ちを分かってくれる	.529	.768
指導者自身の時間を割いて教えてくれる	.522	.739
自分で考えさせてくれる	.376	.733
信じてくれる	.638	.665
細かい技術を教えてくれる	.519	.662
「勝てる」と言ってくれる	.649	.648
みんなを引っ張ってくれる	.592	.634
これからのチームについて語る	.522	.634
試合中勝っていても、気を抜かないように言われる	.543	.603
罰ゲームをつける	.234	.555
級内相関係数	.97	.95

表 3 ネガティブ・ストロークの因子分析

	因子負荷量	
	I	II
やりすごすことのできるストローク		
ボールなどを投げつける	.895	.105
罰としてランニングなどの長時間のトレーニングをさせる	.876	.132
平手でたたく	.712	.495
足で蹴る	.690	.535
メガホンなどの物でたたく	.645	.465
人格を否定するような言葉を使う	.543	.415
身の回りの世話をさせる	.488	.344
生理的苦痛の認知を伴うストローク		
指導者のマッサージをさせる	-.004	.871
水を飲ませない	.403	.728
罰として正座をさせる	.523	.676
拳で殴る	.358	.658
級内相関係数	.90	.83

賛動機も顕示ストロークによりある程度予測できることが示された (Adjusted $R^2=.30$, $F=14.67$, $p=.001$)。熱中動機は顕示ストロークと生理的苦痛を伴うストロークによりある程度予測できることが示された (Adjusted $R^2=.44$, $F=13.69$, $p<.000$)。ユニーク願望動機は、示唆ストロークによりある程度予測できることが示された (Adjusted $R^2=.27$, $F=13.03$, $p=.001$)。

続いて、ハラスメントにつながる恐れのあるネガティブ・ストロークが将来の達成動機に影響を及ぼすか検証するため達成動機の4因子を従属変数、やり過ごすことのできるネガティブ・ストロークと生理的苦痛を伴うネガティブ・ストローク、これら二つのハラスメント受容傾向を予測因子とした重回帰分析の結果、生理的苦痛を伴うネガティブ・ストローク受容傾向が挑戦動機にネガティブな影響を及ぼす可能性が示された (Adjusted $R^2=.26$, $F=12.33$, $p=.001$)。また、他者称賛動機は予測モデルとしての適合度は低いものの、生理的苦痛を伴うネガティブ・ストローク受容傾向が何らかのネガティブな意味をもつ変数であることが示された (Adjusted $R^2=.14$, $F=6.18$, $p=.001$)。熱中動機は生理的苦痛を伴うネガティブ・ストロークによりある程度のネガティブな影響を受けることが示された (Adjusted $R^2=.30$, $F=14.39$, $p=.001$)。ユニーク願望動機も予測モデルとして適合度は低いものの生理的苦痛を伴うネガティブ・ストローク受容傾向が何らかのネガティブな意味をもつ変数となることが示された (Adjusted $R^2=.13$, $F=5.70$, $p=.023$)。

IV. 考察

本研究の結果は、バレーボールにおける指導者のストロークが、選手の将来の達成動機に影響を及ぼすことが示された。この結果は、ポジティブ・ストロークが選手に好影響を及ぼすことを実証的に示しており、今後の各年代のバレーボールにおけるコーチングに役立たせることができる。また、スポーツにおけるインテグリティの保護が重要な課題の一つになっている今、ハラスメントにもつながると考えられるようなネガティブ・ストロークが、選手の将来の達成動機にネガティブな影響を及ぼすことが示されており、インテグリティを追求する意義を示すことに貢献するといえるだろう。

そして、本研究のインテグリティ研究における位置付けに関し、次についても本研究の意義の一つと考察された。ポジティブ・ストロークが選手に何らかのポジティブな影響を、ネガティブ・ストロークが選手に何らかのネガティブな影響をおよぼすであろうことは容易に想像がつくことでもある。しかし、具体的に選手の達成動機におけるどの下位尺度に、どの程度の影響をおよぼすのか示されたことは、指導者に科学的根拠をもってインテグリティ保護の重要性を説く一つの材料となり、インテグリティの追求を広く展開することを後押しする知見の一つとなるであろう。

具体的に見ると、ポジティブ・ストロークは、達成動機のうち純粋な挑戦を楽しむような挑戦動機に強く影響を及ぼすことが示された。達成動機は各分野で成功の鍵とされており、選手の将来やキャリアを考えたときに非常に重要である⁹⁾。とりわけ挑戦心は、アスリートとしてだけではなく社会人として活躍する上でも重宝される場所であろう^{3),14)}。また、本研究ではポジティブ・ストロークが「顕示ストローク」と「示唆ストローク」に分けられたが、選手に難しい課題を与えながら自分で考えさせる示唆ストロークが、ユニークな存在であることを示すことに動機づけられるユニーク願望動機に影響を及ぼす可能性が示された。このことも自立したアスリートを育てることを考えると非常に有益な知見となるであろう。一方で、挑戦動機をはじめ、他者称賛動機、熱中動機は丁寧な説明など言語化された明示的なストロークによりポジティブな影響を受ける可能性が示された。こうした結果からは、コーチングの際に言語により明示的なストロークを送ることと、選手自身が考える余地を残し示唆的なストロークを送ることの両方が達成動機にポジティブな影響を及ぼすことは念頭に置くべきであろう。

いずれの結果も、今現在どのようなストロークを受けているかを聞いた研究ではなく、過去に受けたストロークが現在の選手の達成動機に影響を及ぼすか検証したものである点が重要である。つまり、指導者が選手に送るストロークは、選手の将来に影響を及ぼすのである。スポーツにおいては今どうあるかも重要であ

表 4 達成動機とストロークの記述統計と度数分布

	n	(%)	Mean	(SD)	95%CI	
					Lower	Upper
達成動機	33					
挑戦動機			60.79	14.70	55.58	66.00
他者称賛動機			29.24	8.95	26.07	32.42
熱中動機			14.91	4.55	13.30	16.52
ユニーク願望動機			14.21	4.66	12.56	15.86
肯定的ストローク	33					
顕示ストローク			68.00	15.57	62.48	73.52
示唆ストローク			59.97	13.59	55.15	64.79
やりすぎることのできるネガティブ・ストローク	33					
ボールなどを投げつける						
経験						
適切な行為	4	(12.1)				
なし	13	(39.4)				
1-4 回	6	(18.2)				
5 回以上	14	(42.4)				
罰としてランニングなどの長時間のトレーニングをさせる						
適切な行為	12	(36.4)				
なし	11	(33.3)				
1-4 回	12	(36.4)				
5 回以上	10	(30.3)				
平手でたたく						
適切な行為	4	(12.1)				
なし	19	(57.6)				
1-4 回	8	(24.2)				
5 回以上	6	(18.2)				
足で蹴る						
適切な行為	3	(9.1)				
なし	21	(63.6)				
1-4 回	7	(21.2)				
5 回以上	5	(15.2)				
メガホン等の物でたたく						
適切な行為	3	(9.1)				
なし	21	(63.6)				
1-4 回	6	(18.2)				
5 回以上	6	(18.2)				
人格を否定するような言葉を言う						
適切な行為						
なし	23	(69.7)				
1-4 回	3	(9.1)				
5 回以上	7	(21.2)				
身の回りの世話をさせる						
適切な行為	14	(42.4)				
なし	13	(39.4)				
1-4 回	17	(51.5)				
5 回以上	3	(9.1)				
生理的苦痛の認知を伴うストローク						
指導者のマッサージをさせる						
適切な行為	6	(18.2)				
なし	26	(78.8)				
1-4 回	6	(18.2)				
5 回以上	1	(3.0)				
水を飲ませない						
適切な行為	1	(3.0)				
なし	27	(81.8)				
1-4 回	4	(12.1)				
5 回以上	2	(6.1)				
罰として正座をさせる						
適切な行為	3	(9.1)				
なし	24	(72.7)				
1-4 回	6	(18.2)				
5 回以上	3	(9.1)				
拳で殴る						
適切な行為	1	(3.0)				
なし	29	(87.9)				
1-4 回	2	(6.1)				
5 回以上	2	(6.1)				

表5 達成動機に対するストロークの影響

Outcome	Model Factor (Covariate)	B	SE	β	t	p	B 95%CI		VIF	R ²
							Lower	Upper		
挑戦動機		6.11	6.20							.72***
	顕示ストローク	0.80	0.09	0.85	9.05	.000	0.62	0.99	—	
他者称賛動機		7.08	5.93							.30**
	顕示ストローク	0.33	0.09	0.57	3.83	.001	0.15	0.50	—	
熱中動機		7.88	2.88							.44***
	顕示ストローク (生理的苦痛認知ストローク)	0.12 -1.15	0.04 0.34	0.41 -0.46	3.03 -3.38	.005 .002	0.04 -1.84	0.20 -0.45	— 1.07	
ユニーク願望動機		3.04	3.17							.27**
	示唆ストローク	0.19	0.05	0.54	3.61	.001	0.08	0.29	—	
ネガティブ・ストローク ^a										
挑戦動機		70.15	3.46							.26**
	生理的苦痛認知ストローク受容傾向	-51.49	14.66	-0.53	-3.51	.001	-81.39	-21.59	—	
他者称賛動機		33.60	2.27							.14*
	生理的苦痛認知ストローク受容傾向	-23.96	9.64	-0.41	-2.49	.019	-43.62	-4.30	—	
熱中動機		16.35	0.77							.30**
	生理的苦痛認知ストローク	-1.40	0.37	-0.56	-3.79	.001	-2.16	-0.65	—	
ユニーク願望動機		16.40	1.19							.13*
	生理的苦痛認知ストローク受容傾向	-12.04	5.05	-0.39	-2.39	.023	-22.33	-1.75	—	

a ネガティブ・ストロークの達成動機に対する影響を検討するためポジティブ・ストロークを分析モデルから除外
*p<.05, **p<.01, ***p<.001

るが、選手の将来や幸せなキャリアを考えることも同様に重要であり¹⁾、選手の将来に関わることを自覚する必要が示されたともいえるだろう。

そして、スポーツ・インテグリティの観点から考えると、スポーツにおいてもインテグリティは当然重要であるが、現場でインテグリティの保護を拡大させることを考えた場合、競技力にも好影響を及ぼすという科学的根拠が蓄積されると、よりインテグリティ保護の推進が容易になるのではないだろうか。本研究では将来の競技力の予測因子となる可能性の高い達成動機に対する影響を検証した。これに加えて指導者がストロークを送るその時の競技力との関連も検証する必要があるだろう。

そして、暴力や暴言、水を飲ませないといった罰を与えるなどの極端なネガティブ・ストロークを含め指導者のネガティブ・ストロークは、選手の達成動機を小さくすることが示唆された。この結果からは、指導者のネガティブ・ストロークは、キャリア上の成功を予測する重要な因子である達成動機にネガティブな影響を及ぼすと考えれば、将来の可能性を摘んでしまうことになりかねないといえる。こうした事実を自覚したコーチングが必要である。阿江(2000)は、運動部指導者の暴力的行動に実態と社会的影響過程を検討するなかで、体罰は「萎縮」「不安」を生み「同調」「追従」といった負の効果をもたらす可能性を憂慮している²⁾。この「萎縮」「不安」「同調」「追従」といった状態・感情・反応は、近年、組織としての学習を促し創造性を引き出す鍵と考えられている心理的安全とは正反対のものである⁴⁾。失敗を恐れず挑戦しその過程で学習し結果的に創造性が引き出されるという過程はスポーツにおいて競技力を向上させる上でも、選手の長いキャリアにおいても非常に重要である。こうした点からも体罰のような極端なネガティブ・ストロークはスポーツの現場に無用であるといえよう。

これまでにもポジティブなストロークが重要であることは、交流分析の文脈から人間関係やチームビルディングにおいて重要であることが示されてきた⁷⁾。それに加えて、選手の将来やキャリアにおける達成動機に影響を及ぼすことが示されたため、今後のバレーボールの現場において、ネガティブ・ストロークが減り、ポジティブ・ストロークが増えることを期待したい。もしそれが実現すれば、競技力の向上、選手の幸せなキャリア、インテグリティの保護にも改善の道が開けるだろう。

V. 結論

本研究では、バレーボールにおいて指導者のストロークが選手の将来の達成動機に影響を及ぼすことが示された。そして、バレーボールの現場において、ネガティブ・ストロークを減らし、ポジティブ・ストロークを送ることが選手の将来の競技力の向上、幸せなキャリアの実現、バレーボールにおけるインテグリティの保護を促進する可能性を示した。

VI. 謝辞

本研究は、朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科 2 期生砂川宝樹君の卒業研究で取得したデータを用い再分析と新たな考察を加えたものである。また、本研究は JSPS 科研費の助成を受けた研究の一部である（研究課題：21K17607）。

引用文献

- 1) 阿部拓真, 木村和彦, 醍醐笑部, 作野誠一 (2021) アスリート・キャリアに関する国内研究の動向と課題：スコوپング・レビューを通じて. 体育・スポーツ経営学研究, 34, 1-23.
- 2) 阿江美恵子 (2000) 運動部指導者の暴力的行動の影響：社会的影響過程の視点から. 体育学研究, 45, 89-103.
- 3) Berlew, D. E. and Hall, D. T. (1966). The Socialization of Managers: Effects of Expectations on Performance. *Administrative Science Quarterly*, 11(2), 207-223, doi: <https://doi.org/10.2307/2391245>.
- 4) エドモンドソン, A.C., 野津美智子 (訳) (2014) チームが機能するとはどういうことか: 「学習力」と「実行力」を高める実践アプローチ. 英治出版: 東京.
- 5) 長谷川 誠 (2019) スポーツ活動におけるパワーハラスメント問題からみる指導者と選手の関係ー A 大学アメリカンフットボール部「反則タックル問題」を事例にー. 佛教大学教育学部学会紀要, (18), 79-89.
- 6) 堀野 緑 (1987) 達成動機の構成因子の分析. 教育心理学研究, 35(2), 148-154.
- 7) 北森義明 (2008) 組織が活きるチームビルディングー成果が上がる, 業績が上がる. 東洋経済新報社: 東京.
- 8) 熊安貴美江 (2013) スポーツにおける暴力 / セクシュアル・ハラスメント: 見えにくいハラスメントの現状と課題. 女性学・ジェンダー研究の現在, 127-153.
- 9) McClelland, D.C. and Burnham, D.H. (2003) Power Is the Great Motivator. *Harvard Business Review*, January 2003, 117-126.
- 10) スポーツ庁. 我が国のスポーツ・インテグリティの確保のために. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/choukan/detail/1406121.htm (参照日 2022 年 2 月 7 日).
- 11) 佐野 茂 (2015) 若者の社会的関係における主張性行動に関する一考察: 交流分析におけるストローク理論を手がかりに. 大阪商業大学論集, 11(2), 15-29, doi: <https://ci.nii.ac.jp/naid/120005653549/>.
- 12) 佐野 茂 (2018) 学校不適応予防としての「主張性行動」に関する一考察: 教育相談・生徒指導の一方法としてのストローク理論の活用. 大阪商業大学教職課程研究紀要, 1(1), 1-11, doi: <https://ci.nii.ac.jp/naid/120006600074/>.
- 13) 富江英俊 (2008) 中学校・高等学校の運動部活動における体罰. 埼玉学園大学紀要, (8), 221-227.
- 14) 若林 満 (2006) 組織内キャリア発達とその環境. 経営行動科学, 19(2), 77-108.

- 15) 矢澤久史(2019)指導者の教え方がスポーツ選手のやる気に及ぼす影響. 名古屋短期大学研究紀要. (57), 15-25.